剣道具がない場合における剣道の戦術学習モデルに関する研究

ー中学校第 1 学年を対象としてー

松永　武人　（福岡教育大学大学院）

【目的】

本研究では，戦術学習モデルをベースに授業を展開した。戦術学習モデルをベースとした授業展開に関する先行研究では，大きく分けて2つの課題が示された。1つ目が，剣道具を用いない場合において，螺旋型に学習を実施することで，思考力・判断力の向上と，それに伴う技能の向上を効果的に結び付ける授業展開の工夫の必要性についてである。2つ目は，効果的な礼節的指導についてである。単に形式的に繰り返し行う指導においては，牽いては運動量の確保不足といった課題につながることも明らかとされ，効果的な礼節的指導の工夫を実施することで，礼に関する意義といった知識の向上と，技能の向上を効果的に結び付ける授業展開の工夫の必要性が示された。

本研究では，先行研究により着目される2つの課題に則して戦術学習モデルを作成し，中学校現場において，授業実践を行うこととした。授業実践から明らかとなった成果と課題を示すことで，剣道具を用いない剣道の授業展開における研究資料，指導資料を提供することを目的とする。

【対象及び時期】

F 県にある T 中学校第 1 学年男女合同 57 名（男子 31 名，女子 26 名，うち男女各 1 名剣道経験者，その他未経験者）の生徒を対象とした。授業実践者は同中学校保健体育教師 1 名（剣道経験あり）と，研究者（剣道四段）による補助で行った。授業実践は，平成 29 年 1 月中旬から 2 月中旬にかけて実施した。

【授業内容】

本研究においては，全 9 時間で授業を実践した。先行研究（本多，2015）の課題を踏まえ，本研究では，内容の精選を行い，戦術学習モデルを作成した。本授業では 2 つの戦術に精選をしており，攻撃パターン①，攻撃パターン②としてその 2 つの戦術の指導を行うこととした。単元は，攻撃パターン①の学習，攻撃パターン②の学習，それらを活用･応用したオリジナルの攻防展開づくりの 3 つのブロックで構成した。3 つのブロックそれぞれの学習において，技の理解から習得，活用の場を設定し，思考と試行の往還を図り，そうした学習を単元を通して繰り返すことにより，「螺旋型」による授業展開を実施した。また，礼節的側面の理解を効果的に促すために，グータッチやハイタッチによる挨拶など，学習者相互の肯定的・情意的コミュニケーションを取り入れ，適切な場や機会において，礼の意義や理解を促す工夫を「弓引き学習」として実施した。

【分析結果及び考察】

本研究の授業実践を，「オリジナルの攻防展開づくりのシート分析」，「技能動画分析」，「知識に関する記述テストの評価分析」の 3 つの視点から分析したところ，以上のことが明らかとなった。

「オリジナルの攻防展開づくりのシート分析」では，すべての生徒が学習した攻撃パターンを組み合わせ，自分たちで思考を凝らしてオリジナルの攻防展開による技をつくることができていることが明らかとなった。

「技能動画分析」では，基本動作，オリジナルの攻防展開づくりのそれぞれの打撃において，点数の差がなく，基本動作に加え，オリジナルの攻防展開においても高い得点を得ることができていることから，技能向上の成果を示唆する結果となった。これらの結果は，学んだ戦術を理解するだけでなく，習得・活用する時間を十分に確保し，螺旋型の授業展開によって，オリジナルの攻防展開へとつなげるといった思考と試行の往還による授業展開の有効性が示された。

「知識に関する記述テストの評価分析」では，礼に関する意義について，平均点 4.09 という高い数値を獲得することができた。B 以上の生徒が 92.9%であり，9 割以上の生徒が気持ちを形として表す礼法の意義を理解することができていたことがわかった。これらの結果から，本実践における「弓引き学習」による授業法は，生徒が十分に礼の意義についての理解を図ることができることを示す結果となった。「弓引き学習」による授業展開の工夫は，運動学習時間の確保にも効果的に作用し，技能習得に向けた活動に十分時間をかけることを可能とした。礼節的側面の理解と，技能の向上を効果的に結び付けるのに，この「弓引き学習」が有効的に機能したことが示された。

【結論】

分析項目により得られた結果から，剣道の特性に触れさせ，課題解決に向けた授業づくりに関する価値ある研究資料，指導資料となり，学校現場において大きく貢献し得るものであることが示された。

【参考文献】

本多壮太郎：仲間と協同的に取り組む剣道の戦術学習に関する研究，福岡教育大学紀要，第 59 号，第 5 分冊，2015.